

「……？」

右から左へ、上空を白い影がびゅんと横切った。

ネックは釣られるようにして、顔を左へ向けた。

一羽の海鳥が、砂浜のあるところへ向かって飛んで行っていた。よく見ると、浜の一か所に大群がいる。

どうやら、何かにたかっているようである。十ではきかない数の海鳥たちが忙しく飛び回り、鳴き声を上げていた。

海獣でも流れ着いたか。

「なんだありゃ」

ノランも気づいたようで不思議そうに見つめていた。

見たことのない光景に、二人は海鳥の群れているところへ歩み出した。

ネックとノランは手ごろな棒切れを拾って振るい、海鳥を払いながら群れの中心に近づいた。

「えっ」

思わず声が出た。

それは、魚でも、海獣でもない。

人間だ。

薄い桃色の髪をした、女性だった。

「ウソだろ」

女性は、ずいぶん若いようだった。大人でも子どもでもないその顔立ちは、それこそ十代——ネックたちと同じ十七、八歳くらいに見える。「少女」と呼んでいい。海水を吸った白い衣服には見たことのない模様の刺繍がある。その服には水難でできたとは思えない、焼け焦げたような跡があった。

「俺のせいかな……？」

「そんなわけないだろ」

ノランが先ほど使った魔法が原因と言うのであれば、魚と同じタイミングで樽の中に収まったはずだ。

「じゃあ、身投げか何かか？」

二人は辺りを見回したが、流れ着いたのはこの少女しかいないようだった。

『アリーベ』に来てから、海獣の死骸や珍しい魚が流れ着くことはあっても、人が流れ着いたのは初めてのことだった。

二人は驚きのあまり立ち尽くしていたが、顔を見合わせると少女に声をかけた。

「おい！ 大丈夫か？」

ネックは膝をついて、少女の肩を優しく叩きながら大声で呼びかけたが、反応はなかった。少女の鼻と口元に手のひらを近づけたが、息がかからない。今度は少女の手首を持ち、血管を軽く抑えようとした。

その時、

「う……」

「!!」

少女の唇がかすかに動き、呻き声が漏れた。

ネックはすぐにノランを見た。

「生きてる!!」「生きてるぞ!!」

二人はすぐに、少女の応急手当にかかった。「おい、おい!」と呼びかけながら、ネックは少女の気道を確保する。ノランが自分の衣服を脱いで少女の体を拭く。それから鼓動のリズムで、ぐん、ぐん、ぐんと、左胸を押す。幼少期に教わった、溺れた人への措置。間違っ

てはいないはずだ。

その間に手早く乾いた木屑を集めてきたノランが、少女に声をかけながら魔法で火を起こした。少女の体が冷え切らないようにするためだ。

ネックは少女の胸を押し続け、何度目かを経てようやく、ついに少女が、「げっ」と水を吐いた。

吐しゃ物はない。くふくふと苦しそうだが、確かに少女の呼吸が戻ったのだ。

二人は顔を見合わせ「よし!!」と拳を合わせた。

「ひとまず、家へ!!」